

理事長・三田義一先生との対談

前同窓会長

松見得明

これはまだ旧校舎のあった頃のことである。理事長は月に何度か盛岡の店に来られるのだが、用事が済めばすぐ東京へ帰られるというご多忙さで、お目にかかりたくとも中々その機会が得られず苦勞をしていたのであった。

同窓会としてはいろいろご相談したいことやお願いしたいこともあり、せめて年に一度はお会いしなければと、校長先生や同級生の松田君（三田商店勤務―1回生）にご来盛の折の連絡を頼んだりして、あれこれ手をつくしているうちに、八月のお盆には仕事はなれて、墓参りにおいでになるからその機会がいいのではないかとという連絡があった。それ以来毎年お盆の折にお参りをかねてお伺いしている。

ある年のことである。事前に電話でご都合をお聞きして行き快く迎えられた。応接間に導かれたが、まずお参りをしたいからと祭壇のある部屋へ案内を乞うた。お仏壇に先代理事長のご位牌を拝み、壁に掛けられてある軸を仰いでいたら、勝海舟の書だといわれる。何という字句であったか忘れたが、お盆にふさわしい招魂の言葉であったようで感銘深く拝見したことである。

お参りが済んで応接室にうつり、茶菓のご

接待の冷たい物を頂きながら率直な対談が始まる。

私が三田さんにお会いするのは母校のことについての希望を申しあげることにより目的があるのであるから、話の内容は自然陳情、要望折衝のようなことになるのが常であった。理事長にとっては面白いものではなかったと思う。にもかかわらず快く耳を傾けてくださったのは岩中卒業生という親近感と、岩中を立派なものにしたいという共通の願いによるものであったろうと思うのである。

つぎに記憶の中二・三をたどってみよう。

入試合格判定基準について

その頃岩中では五〇〇点満点の三五〇点以下は切り捨てていた。それでは高すぎて入学生が減り士気が下がらないと思い、もつと下げる方がよいのではなからうかと提案したのであった。

すると「そんなことをしたら生徒の質が下がるではないか。生徒数が少なくなつたていいではないか」といわれる。そこで私は、

「お言葉ではありませんが、ご承知のように私も県立高校に長年勤め、何度も入試を行ないその経過、推移を見てきています。県教委

では正解が六割を予測して出題しているのですが、都市部のいわゆる進学校はともかく、その他の高校では六割どころか五割にも満たない学校が沢山あります。それでも三年間教育しているうちに立派に育つて進学もし、役にたつ人間になっていきます岩高の場合は七割以下を切り捨てている。ということは育て得る者を捨てているということになります。如何がなものでしょうか。五割以上であれば充てん育ちます。それが出来ないなら教師が悪いとも言えるでしょう。生徒数が少ないと経営もさることながら、生徒間の士気も奮わなくなりません。」

などと口はばつたいことを申し上げたのだったが、ご納得いただけたようでその翌年からは考慮がはらわれたようであった。

校舎建替えについて

昭和五二年四月一日日に炎上した校舎は昭和一三年に建てられたもので既に老朽化しており、改築を必要とする時期に来ていた。他の県立高校は軒並み鉄筋コンクリート三階建ての近代的なものになり、見劣りがして肩身の狭い思いがしていた。

同窓会としては応分の協力をもつてということで一億募金を始めていた。そんな状態にあったのでお伺いし、お話しの際合いをみはからつてきりだした。すると

「君、教育は建物ではないよ。松下村塾だって粗末なものだよ。そこからああいう立派な人材が出ているじゃないか、君どうだね。」といわれる。

「そりゃーその通りです。私も教師の端くれですからよく解ります。しかし時代が違ふことも考えなければならぬと思います。今松下村塾のようなことは出来ないでしょうし、通用もしないと思います。文明が発達し科学の進歩著しい現代は、やはりそれに即応した

近代的な教育が必要です。従ってその出来る近代的施設設備が必要になります。そこをお考えいただいて、何とか校舎を建てかえていただけないでしょうか。同窓会としても微力ではありますがお力添えをしたいと思います。と申しあげたら、

「それもそうだが、学校ばかりでなくいろいろしなければならぬことがあるからね」といわれて、じつと考えておられる様子であった。学校が焼けたのはそれから幾許もないころであった。